

巻頭言

この1年を振り返って

臨床心理学部 学部長 香川 克

昨年の5月、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが、5類に変更となった。2020年の2月頃から、全ての人々の生活を大きく制限していた状況が、この5類への変更により、かなり元に戻ったことになる。

もちろん、新型コロナウイルス感染症がなくなったわけではない。私自身も一か月ほど前に感染した。今現在は、感染症としてはすでに完治しているのだが、喉のあたりのいがらっぽさと咳が残っていて、かなり影響を受けている。「少しややこしい風邪」というわけにはいかない、感染症としての難しさは、まだまだ残っている。重症化する方もおられるだろうし、さまざまな場面での感染症防止対策は、まだしばらく求められるであろう。

とはいうものの、一時の生活上の制限の強さは緩和し、生活のリズムは戻ってきている。2023年度はプロ野球も高校野球も通常の観客がいる形で行われている。通勤の電車の中でも、マスクをつけていない人も多くなってきた。何よりも、キャンパスには学生が戻ってきた。対面での授業も行われ、学生たちの課外活動の制限もほぼなくなってきた。

ウィズ・コロナでありつつも、ポスト・コロナの社会状況になってきており、「元に戻った」ことはたくさんある。しかし、やはり「コロナの時期を経て、元には戻らない」ことも多いのではなかろうか。特に、コロナ前にも進みつつあった人と人の関係の在り方の変化は、根深いものがある。そうした変化の全体像と影響の深度は、今後さらに明らかになってくるであろう。

昨年、この巻頭言で「変わりゆくもの・変わらないもの・気づかぬうちに少しずつ変わっていくもの」ということを書いた。1920年代の社会の中における、人と人の関係性の変化についても、「変わりゆくもの」と「変わらないもの」があるだろう。私たちの臨床心理学は、関係性の中で人が人に関与していくという営みを基盤にしている。今回の新型コロナウイルス感染症のインパクト、そして、そのことと関連しつつ進んできた社会の変化の中で、今起きつつある変化の影響を見定めつつ、研究を深化させていこうとする営みが求められるであろう。

本号では、博士後期課程の大学院生による論文も掲載され、フレッシュな若手の研究から大ベテランの先生による論考・研究まで、幅広い論文を掲載することとなった。先生方の活発な研究活動の歩みの一端が現れていることと思う。引き続き、自由な研究活動が行われるよう、少しでも環境を整えていきたいと考えている。